

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 アルベール・カミュ 『ペスト』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

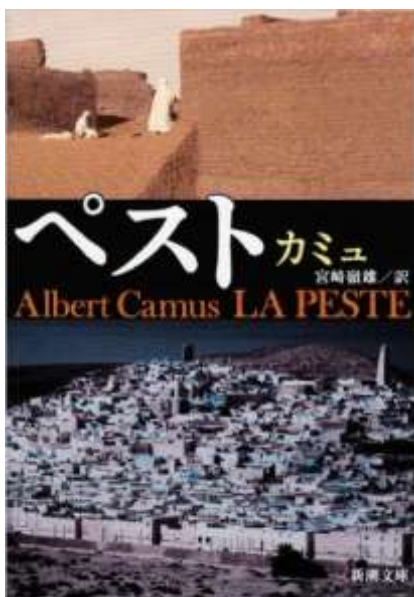
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 76 回のツイキャス読書会の課題図書は、アルベール・カミュ 『ペスト』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『本当の敵』

この物語はあまりにもあっけない。形のないペストという曖昧な概念に人々はさらわれ、怯える。死を弔う暇も、悲しむ力も備わっていない。普通の市民も、医者も、神父も、囚人も、看守も皆ペストという牢獄の中に入れられた捕らわれの身である。戦おうとしても、敵は見えない。そもそも、戦うということ自体が不可能である。受け身になって死を恐れつつ、自棄になるばかりだ。

この「記録」の著者であり、主人公でもあるリウーは、全く英雄というには程遠い人物である。自分の患者の死を悲しむことも、人々をペストから救おうという使命感もあまり感じられない。彼は医師という職務の中の一つの歯車にすぎず、ただ自分に与えられた仕事たんたんとなしているだけに見える。ペスト事件の前後にオラン市の市民の生活ぶりは大分変わったが、このリウーの視線は終始一貫ぶれない。無味乾燥とも言おうか、彼はあまりにも物事を「理性的」に捉えている。愛する妻への恋しさも彼の人間味を見せてはくれなかった。ペストはこのリウーそのものではないかと思われる位、彼はペストを誰よりも正視しながらも、頓着しない。

登場人物が多く、場面もころころ変わる作品であるだけに、難しい作品ではあったが、知事をめぐった「ペスト」宣言までの模様は興味深かった。市民の命を第一に考えねばならない官僚らは、「責任」云々しながら堂々巡りを繰り返す。恐らく世界中の非常事態の際には、こういう官僚主義に満ちた無味無臭な会話が交わされ、多くの人々の命が危険にさらされていると思うと、やるせない感がする。

本当の敵は、「ペスト」ではなく、人々の怠惰、自暴自棄、不人情ではなかったかと思った。ペストは人々から愛と情を根こそぎ奪い去った。ペストが収まったあとのオランは、元通りに戻れるのだろうか。一見そう見えても、ペストが彼らの胸に植えた「不人情」は永らく残っていて、また新たな災いを呼ぶのではないか気になってならない。

(おわり)

スミカズさんの主宰する 炭山 韓国読書会のブログとツイキャスです。

ブログ <https://ameblo.jp/shimogashiwa>

ツイキャス <https://ssl.twitcasting.tv/c:nindaranna>

誠意ってなにかね？

小学校に上がったばかりの私に遺伝性の目の疾患がある事を知った母は、私を抱いて病院の屋上から身を投げようと考えたが、何も知らない私の顔を見て踏みとどまったらしい。

その頃奈良県に本部？ある宗教に没頭していた叔父は「お前の目が治るように神様にお願いしよう」と、その神様の名前を言ってお祈りをしていたのを思い出す。

そのおかげかどうかわからないが、信仰を持たない私が30半ばを過ぎても死なずに生きて、目を使った生活ができています。

以前難病のⅠ型糖尿病の息子を治してほしい、と祈禱やお祓いをする竜神を名乗る男に息子を預けた母親がいて、自称竜神は神のお告げだとその子の命をつなぐのに不可欠なインスリンの投与を止めさせ、その子を死に至らしめた。

他方では生活習慣病が元でⅡ型糖尿病となり、その合併症で腎不全になり人工透析を受ける患者に対し「全額自己負担にさせろ、いやなら殺せ」とブログで語った元大手テレビ局のアナウンサーがいた。

前者は信仰の問題、後者はすべて自己責任論なのだろう。

私はペストの大流行で封鎖されたオランが自分の勤務する病院に重なった。

年々数を増す高齢者。安価で偏った栄養の食事をしてきた方々はストレス社会で若いうちに無理をし、重篤化するまで症状が現れない糖尿病を初期のうち指摘されても放置し、その合併症が高齢になってから現れた。

夏休みの宿題を新学期が始まる前の晩に全てやろうとしても無理なのと同じで、病気の対処も早くからコツコツしておくべきだったのに。

患者が増えればスタッフの負担は増える。だから業務を効率化しようとする。リウーが疲労困憊になり診断を続ける姿、タルーが死者の名前の書かれたカードをランペールに見せて「僕たちの仕事は簿記なんです」と言ったのも頷ける。

ただそれが続くと患者を病気の人としてしか見なくなる、患者を自分たちの都合に合わせるようになってしまう世界がある。「介護困難」と自宅に帰れない高齢入院患者の顔と、封鎖されたオラン市民の諦めの表情はきっと似ているだろう。

それでいいのか？ただ終わらない病気や死を敗北と思い淡々と業務をこなすのがいいのか？

私はそこにせめて誠意とか誠実を持って取り組むようにしている。方法は「なんだそんなことか」とバカにされそうだが、相手の話をよく聞く、相手の目を見て丁寧な口調で話をする。つい自分の愚かな考えが邪魔してしまい私にとっては難しいが、受容と共感こそが相手を一人の人間としてみる一歩と信じ実践している。

職場だけでなく、家庭や学校などでも言える事だと思う。

花を摘むのに夢中な人を死がさらっていくように、眠っている村を洪水が押し流していくように

花を摘むのに夢中になっている人が未だ望みを果たさないうちに、死神が彼を征服する。

ブッダの言葉だ。わが世の春を謳歌しても、卑屈に生きて誰かを呪ったり死ぬ事ばかり考えていても時間は過ぎ、生き物である人間は死を迎える。

ならば生きる事、死ぬ事、神や自然などの大いなるものに誠実に生きていこう。 (おわり)

わたしは何をなすべきか。

グランが病魔に襲われた夜、何年にも渡って書き直し、生きがいであった小説の書き出しの本を捨ててくれとリウーに頼む場面。

タルーとの友情を確認した夜の海水浴と、ペストに襲われて苦しみながら絶えるその命。

この二つのシーンは、心の底がねじれるような息の詰まる感覚だった。

この悔しい気持ちやこぼれる涙はなんだろうか。

登場人物への同情の憐れみよりもまず、人智は自然と闘えるのかと問うているカミュからの問いかけに、わたしは即答できるほど深くこの人生をとらえられていないから。

カミュの人間への深い信頼や愛情に触れた気がして、もう一度ゆっくり読もうと思った。

世の中、理不尽なことは起きる。

日常が平和に見えても世界はいつでも動いているし、自然がいつも優しいとは限らない。

戦争やペストのような町の封鎖は体験していないけど、震災のときに感じた集団心理の恐ろしさや、俗っぽいデマや、あるとき声高に叫ばれていた慈善活動の押し売りに、一瞬自分を見失いそうになり、そして心底うんざりした。

自分は自分らしく。そして同時に、自分が所属しているいまの社会に対して、良心と行動でお返しなくてはならないと思っている。こんな陳腐な言葉では偽善のように聞こえるけれど、人間のなすべき善意とは何かをカミュが切々と書いていたので、素直にそのことを思い出した。

わたしは、何をすることができるか。

わたしは、何をなすべきか。

「ペスト」の中にそういうテーマを感じたけれど、実際の生活の中でなすべきことや本当の意味ではまだ言葉にできない。

本の後半に、何度か「謙譲」という言葉が出てくる。

謙譲＝humilité

恥ずべき事を知り、謙虚を心づもりとする。

人智のタフさが試されたときに、タフにいられるように訓練するには、やはり謙虚さや先人への尊敬かなと思い、読書は自分自身の謙虚さを更新するために必要なものだとあらためて思った。

(おわり)

『唯一の敗北』

「際限なく続く敗北」

一体、リウーは敗北したのだろうか。

たしかに自分の手で彼ら患者を治す、守ることができなかったことは職務上の敗北になるのかも知れないがしかし、私は、リウーの唯一の敗北はタルーの死ではないかと思った。

病魔との戦いに打ちひしがれていたというよりもむしろ感覚麻痺していたリウーだったが、戦中リウーが涙を流したのは後にも先にもタルーの臨終だけだった。そして戦友の死を前に「(失った悲しみが癒える)休戦などは存在しない」ことは「わかっているような気がした」とリウー自身が文中で語っている。

リウーにとってタルーはまるで兄弟のような気のする人で、もうちょっと心を打ち明けてみたい「不条理な欲望」を禁じ得ない相手だった。

志願の保健隊は役人や囚人などではなく自由な人間がいいとリウーは考えていた。前例のない困難に挑むのに必要な想像力は表向きの方法では期待できないと。見返りを求める気持ちを捨てその行為自体を自分の使命と捉えるボランティアな精神をリウーは信じた。

タルーは、あなたはどのようにここまでするのですか、あなたは神を信じていますかと、この戦いの意味合いをリウーに尋ねた。対するリウーの言葉を以下に拾いあげてみた。

“傲慢だと思われるかも知れないが、やはりこの戦いに挑むことが真理につながっている。私は貧しさの中で医師になった。動機は世間並みに地位を得ることだった。だが死に行く人が死ぬのが嫌だと叫ぶのを目の当たりにし、私はその叫びにこの先も鈍感でいることはできないと気づいた。私は神が黙している天井の世界でなく、今この目の前の世界で死と戦う。たとえそれが一時的なものであっても。”

リウーは戦友を得た。リウーのろうそくの灯りが仲間たちの心に宿り、それがひるがえってリウーのろうそくの灯火となった。

リウーは、残されたタルーの面影、生の温かみと一つの死の面影こそが「知識」だと言っている。タルーの真実は読み取れないけれど、実在していた彼の実体が「知識」なのだと。ペストとともに友人は奪われたが、「知識」は残された。

彼との出会いと別れは、これからもリウーにとってのろうそくの灯火であり続けるのだろうと感じた。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 愛せない世界 』

「僕は愛というものをもっと違ったふうに考えています。そうして、子供たちが責めさいなまれるように作られたこんな世界を愛することなど、死んでも肯んじません」(P322・10行)これは、オトン判事の幼い息子がペストに倒れた際に、パヌルー神父が「自分たちに理解できないことを愛さねばならない」と呟いたことに対するリウーの返答だ。確かにパヌルーの言うことも一理あるかもしれない。しかし、「不条理」というものは点在しているのではなく、我々人間は「不条理」という海に漂う木の葉のごとく存在だと私は思う。しかし、パヌルーのいう「われわれの尺度を超えたこと」をいちいち受容しては、リウーのいう「愛せない世界」に甘んじなければならない。本来は誰よりも世界を愛したいリウーは、ペストという不条理との戦いを辞めなかったゆえの「際限なく続く敗北」だ。戦わなければ敗北なんてあり得ないのだ。

この記録の筆者であるリウーはいう。「世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するもの」であり、「善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる」と。オランに降りかかったペストとの戦いで、人間が勝ち得たものは「知識と記憶」であり、タルーが呼んでいた勝負に勝つということだとリウーは記録する。小説の最後にこの記録の筆者がリウーだと判明するが、何よりも「知識と記憶」が大事だと気が付いたゆえの克明さなのかもしれない。幼い子供や友人の死の記録も、将来を「愛すべき世界」にするためのリウーの戦いのひとつであったのだろう。リウーは神よりも観念よりも、「人間」を愛していたのだ。

ペストの脅威が去って、喜悦にひたる群衆は知らない。ペストが消滅したのではなく、辛抱強く待ち続けていることを。また再び、幸福な都市をジョーズのテーマのように恐怖が襲うことを。でも、その際にリウーが残した「知識と記憶」によって、いかに我々人間がリウーに愛されていたかを知るだろう。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「地には無関心、人には無力感」

コタールは、罪を犯して自殺未遂するほど悩んでいた。密告を恐れて暮らしていたが、ペストの蔓延のおかげで、捜査は中断され、彼は、急に自由になった。ペストのおかげで、元気になった。コタールが恐れていたのは、自分の無力感である。

町が非常事態になると、彼に生きる力がわいてきた。町の住人も彼と同じくペストに対して無力だからである。彼は急に仲間をえたような気がして安心した。ペストが収束すると、彼はまた独りぼっちになった。だから、無力感に抗うために、銃を乱射して逮捕されてしまった。

最初、ペストの蔓延を、見かけばかりの信仰に対する神の懲罰だと、パヌルー神父は断言した。しかし、オトン判事の息子が、血清投与の甲斐もなく苦しみのなかで死んだとき、無力感を味わった。彼は自分の信仰の無力に直面し、宗教者としての無力感と戦った。

ランベールはスペイン内戦での人民戦線の敗北によって、無力感を味わった。愛する者のためにだけに生きるというのは、無力感の裏返しだった。

タルーの父は、裁判官であった。何人もの被告人に死刑判決を言い渡し、死刑に立ち会っていた。人が人を死刑にするというよくよく考えれば不条理なことが、倫理的に当たり前のことだと受け入れられる家庭、ひいては社会の雰囲気は耐え難かった。死刑制度に対する倫理的無力感ゆえに家出して、苦勞して資産家になって生活していた。そして、ペストとの戦いを、死刑制度を当然だと思ふべき人間社会の欺瞞との戦いに変えて、リウーと連帯した。倫理的無力感の克服が彼のテーマだった。

グランは、無力感を詩作で乗り越えようとした。言葉が自由でなかったばかりに、妻のジャーヌに愛の言葉をかけてあげられなかった。彼は、自分だけのための創作活動によって、自身の無力感を乗り越えようとした。

リウーの勇気は、多くの仲間を動かした。彼の実践は普遍的な道徳として受け入れられた。ペストが収束するまで、彼はあきらめなかった。彼の目的は、人の世の無力感と戦い続けることだった。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343